新見公立大学紀要　第34巻
pp. 111－120, 2013

報　告

John Steinbeck原作*Burning Bright*（『爛々と燃ゆる』）の日本初の公演

山内　圭*

新見公立大学看護学部

（2013年11月13日受理）

本報告は2012年5月に板橋演劇研究会によって行われたジョン・スタインベック（John Steinbeck）のBurning Bright（『爛々と燃ゆる』）の日本における初めての公演に関するものである。著者は、本邦初演となるこの作品の舞台化に関わったので、それをここに報告する。
（キーワード）ジョン・スタインベック，『爛々と燃ゆる』

いきさつ

2012年5月，ジョン・スタインベック（John Steinbeck）原作『爛々と燃ゆる』（*Burning Bright*）の日本初公演が行われ，筆者は，アドバイザー的役割で同公演に関わった。

今回のステージでプロデューサーを務め「フレンド・エド」役を演じている塚原英志，そして全体のサポートを務めた為国孝和と筆者との出逢いは，2008年11月のLinkProjectによるジョン・スタインベック原作『二十日鼠と人間』（*Of Mice and Men*）の上演時にさかのぼる。筆者は，この舞台に大きな感銘を受け，演出担当の為国と，難しい「レニー」役を見事に演じた塚原にコンタクトを取り，2010年5月23日に北九州市立大学において開催された日本ジョン・スタインベック学会において「スタインベックと『二十日鼠と人間』と演劇と」というタイトルでシンポジウムを行った。

そして，このシンポジウムの参加により，スタインベック原作の舞台化に対する熱意が高まった塚原に筆者は，おそらく本邦未公開である作品として紹介したのが，この『爛々と燃ゆる』[1)]である。塚原は，この原作（大阪教育図書刊『スタインベック全集』第8巻所収の田中啓介による日本語訳）を読み，筆者が送った1959年制作の*Burning Bright*（Broadway Theatre Archive）のDVDを見た。塚原より舞台化の決意の表明が筆者にあったのは，2011年12月のことであった。

舞台化に向けて

その後，本作品舞台化に向けての動きが塚原を中心に行われた。配役選定，役者のオーディション実施，舞台会場の選定などが進められた。オーディションはビクター役について行われ，20人の役者がオーディションに書類応募し，演技審査は10名弱の俳優に対して行われた。

写真1：第35回日本ジョン・スタインベック学会, 2010.5.23

写真2：公演後の記念撮影, 2012.5.19

*連絡先：山内圭　新見公立大学看護学部　718-8585　新見市西方1263-2

その結果，ビクター役を勝ち取ったのは岡田純一である。他の配役は，ジョー・ソールに浅井透馬，その妻のモーディーンに青山碧，ジョーの友人であるフレンド・エドに塚原英志，ミセス・マローイに小沢ミナコ，妖精とゾーン先生を深津哲也が務めた。

『爛々と燃ゆる』の稽古始めは，2012 年 2 月 26 日であった。この日は，翌日 2 月 27 日が原作者ジョン・スタインベックの生誕 110 年の日に当たるため，関係者一同でスタインベックのための誕生ケーキを囲んだそうである。

写真3：HAPPY BIRTHDAY John Steinbeckと書かれたスタインベックのためのバースデーケーキ, 2012.2.26, 塚原英志のブログ「～ガリバーがゆく!!～」より

写真4：稽古始めの日にケーキを囲む出演者たち, 2012.2.26, 塚原英志のブログ「～ガリバーがゆく!!～」より

この演劇の稽古現場を筆者は 4 月 15 日に見学させてもらう機会を得た。稽古の場所は，東京都板橋区の板橋いこいの家であり，日曜日のこの日，午後からの稽古と夜の稽古があった。筆者は，演劇はしばしば観るものの，稽古を見せてもらうのは初めてであった。稽古場ではディレクター席と呼べる稽古場の真ん中の席に座らせてもらい見学をさせてもらった。皆で演劇作品を作り上げるというエネルギーに溢れていて，役者たちの目はまさに爛々と燃えていた。「ジップ，ザップ，ボーイング」や「カウンティング」などのウォーミングアップから，実際の通し演技まで，この日も夜遅くまで熱の入った稽古が続けられた。稽古の後は，夕食をとりながら出演者との「勉強会」を行った。

塚原は，自身のブログ「～ガリバーがゆく！！～」で「貴重な一歩でした！」として記事中で取り上げているが[2)]，これまでは，演劇界と我々文学研究者との交流があまりなかった。演劇に携わる人たちも原作を読み込み，それを舞台芸術として表現する。文学研究者も，やはり作品を読み込み，それを分析するという作業を行う。方法は違えど，互いに共通すること，学び合えることはたくさんあるはずである。ただ，筆者はこの作品を通読した回数は，10 回にも満たない程度であるが，出演する役者たちはこの作品を毎日何度も読んでいる。そして，作品を演じるというのは，まさに，作品の中を生きているということであり，書物として机でこの作品を読んでいる我々研究者とは全く違う読み方である。それでも，作品を鑑賞しているということには違いがないわけで，交流をすれば自分とは異なった鑑賞法をしている側から得ることは必ずあるはずなのである。

この作品の原題 *Burning Bright* は，英国の詩人ウィリアム・ブレイク（William Blake）の「虎」（Tyger, Tyger）の詩の一節から取られたものである。スタインベックの原作では，この詩の一部が作品の冒頭部分に引用されているだけであるが，この度の舞台では，幕間にこのウィリアム・ブレイクの詩の朗読をしたいという提案がプロデューサーの塚原英志より寄せられた。ついては，他者が訳したものを勝手に舞台で使うわけにはいかないので，筆者に対して同詩の翻訳依頼があった。そこで，筆者は下記のように翻訳した。

「虎」 William Blake 作　　山内　圭　訳

虎よ虎，そなたの眼（まなこ）は爛々と燃ゆる
夜の森の中で
いかなる神の手や眼（まなこ）が
そなたの恐ろしい均整のとれた身体（からだ）を作り出すことができたのであろうか？

いかなる深い海や遠い空に
そなたの眼（まなこ）の火は燃えていたのか？
いかなる翼で創造主は天を登ったのか？
いかなる手でその火をつかみ取ったのか？

いかなる肩や技が
そなたの心臓の筋肉をひねり出したのか？
そしてそなたの心臓が鼓動し始めたとき
いかなる恐ろしい手が，いかなる恐ろしい脚が？

いかなる金槌が，いかなる鎖が使われ？
いかなる溶鉱炉でそなたの脳髄は作り出されたのか？
いかなる金床(かなとこ)が，いかなる恐ろしい手が
そなたの恐ろしい身体(からだ)を作り出したのか？

星たちが光の矢を放ち
その涙で天をしめらせるとき
創造主は創造したそなたを見て微笑んだのであろうか？
仔羊を作った同じ創造主がそなたをも作ったのか？

虎よ虎，爛々と燃ゆる
夜の森の中で
いかなる神の手や眼(まなこ)が
そなたの恐ろしい均整のとれた身体（からだ）をあえて作り出したのか？

この詩は，虎の均整のとれた力強い体つきを，そしてその爛々と燃ゆる眼をたたえるものである。ブレイクの詩においては，虎の眼の光る様子を Burning Bright と表現しているが，スタインベックの『爛々と燃ゆる』で燃ゆる眼をしているのは，誰であろうか？筆者の解釈では，主要登場人物 4 人の眼は，全て爛々と燃ゆるものだと思う。今回の舞台では，筆者の上記訳が，浅井透麻，青山碧，岡田純一，塚原英志の 4 人の俳優により朗々と吟じられた。これを客席で聞くのは，翻訳者としては鳥肌の立つような喜びであった。

公演に先立ち，チラシが作成され，チラシに掲載する作品紹介執筆の依頼を受けた。そこで，筆者が書いたのが以下の作品紹介である。

『爛々と燃ゆる』作品紹介

この度のスタインベック原作『爛々と燃ゆる』の公演，誠におめでとうございます。日本ジョン・スタインベック協会としてもスタインベック文学の普及につながるものとして喜んでおります。

本公演は，スタインベックの「問題作」をあえて舞台化する試みとして行われるようですが，この作品の初演は 1950 年でした。彼も自信満々だったこの作品は，ブロードウェイでも演じられましたが，公演はたった 13 回で打ち切りでした。

子どもができない夫婦の心の葛藤を中心に描くこの作品は，当時の米国においてもまだ「早すぎた」作品だったのかもしれません。

この「問題作」を現代の日本にぶつけてみようという試みです。キャストやスタッフの皆さんとは一緒に原作を読む勉強会を実施しようと考えています。私たちの心も爛々と燃えています。どのような舞台化となるか，今から楽しみです。

日本ジョン・スタインベック協会理事
新見公立大学教授　山内　圭

この文章は，公演後 DVD 化された本作品のジャケットにも掲載された。

写真5：チラシ表面

写真6：チラシ裏面

また，公演の際のパンフレットに掲載する文章執筆の依頼も受けた。そこには，本報告と共通する部分もあるが，重複をおそれずここに引用する。

写真7：公演パンフレット表紙

ジョン・スタインベックの『爛々と燃ゆる』について

日本ジョン・スタインベック協会理事　山内　圭（新見公立大学教授）

まずは，記念すべき板橋演劇研究会第１回公演『爛々と燃ゆる』の上演，誠におめでとうございます。今回，プロデューサーを務め「フレンド・エド」役を演じている塚原英志さん，そして全体のサポートを務められている為国孝和さんと私との出逢いは，2008 年 11 月の LinkProject によるジョン・スタインベック原作『二十日鼠と人間』の上演時にさかのぼります。私は，この舞台に大きな感銘を受け，演出を担当された為国さんと，難しい「レニー」役を演じられた塚原さんとともに 2010 年の日本ジョン・スタインベック学会において「スタインベックと『二十日鼠と人間』と演劇と」というタイトルでシンポジウムを行いました。そして，そのシンポジウムが，今回のスタインベック作への再チャレンジにつながりました。

＊パンフレットでは，ここに，本稿における写真１と同じ写真が入る

『爛々と燃ゆる』の公演実施は 2010 年の秋頃決まったと聞いております。その後，着々と準備が進められ，オーディションも行われ，稽古開始が２月 26 日だったと聞きます。その日は奇しくもスタインベックの 110 回目の誕生日２月 27 日の前日で，出演者とスタッフで「Happy Birthday John Steinbeck」の文字が入ったケーキを食べたそうです（塚原英志さんのブログガリバーがゆく　俳優，塚原英志のブログ 2012 年２月参照）。

４月 15 日には，稽古の見学に行かせてもらいました。短時間ですが勉強会のようなものも行いました。私は，その時，作品の中に入り込み，真剣に役を演じることによって原作を解釈している役者の皆さんの真摯な姿を目にしました。主に机の上で原作を読むことにより解釈している私たち研究者とは全く違う角度からの作品解釈法を学びました。

今回の公演の原作『爛々と燃ゆる』（*Burning Bright*）は，アメリカのノーベル賞作家ジョン・スタインベック（John Steinbeck）によって 1950 年に出版された，彼自身「劇小説」（play-novelette）と呼ぶ形式で書かれた作品です。

ここで，作者ジョン・スタインベックについて少し触れてみたいと思います。スタインベックの誕生日については先程少し触れましたが，彼は 1902 年２月 27 日，カリフォルニア州サリーナスに生まれました。彼の生家は，現在「スタインベックハウス」として保存されサリーナスの町の有名スポットの一つになっています。

写真8：サリーナスにあるジョン・スタインベックの生家，2010.8.5筆者撮影

またサリーナスにはナショナル・スタンベック・センターと呼ばれるスタインベックの博物館があり，毎年スタインベック・フェスティバルが開催されています。

写真9：カリフォルニア州モンテレ―にあるスタインベックの胸像と，2010.8.5

スタインベックの代表作としては先ほど挙げた『二十日鼠と人間』（*Of Mice and Men*）の他に，『怒りの葡萄』（*The Grapes of Wrath*），『エデンの東』（*East of Eden*），『赤い小馬』（*The Red Pony*）などがあります。これらはいずれも映画化され，かなりのヒット作品にもなっています。そしてそれぞれ何度も舞台化されています。

このように，作品が映画化や舞台化されても成功をおさめているスタインベックの作品の中でも，しばしば「失敗作」と評されるのが，この『爛々と燃ゆる』なのです。これは，彼が「劇小説」と名付けた形式で書いた3作目の作品でした。1作目は『二十日鼠と人間』，2作目は『月は沈みぬ』で，どちらも成功を収めました。スタインベックは，第3作目の『爛々と燃ゆる』も自信をもって世に送り出したのですが，ニューヨークのブロードウェイでの公演はたった13回で打ち切られました。多くの批評家からも酷評を受けました。スタインベックは，1962年に出版した『チャーリーとの旅』で，自分の演劇での経験を「完全な失敗です」と（おそらく半分は謙遜も込めて）語っているのです。

「劇小説」とは，スタインベックによると，劇の脚本と小説の中間的なもので，その中からセリフを取り出せばそのまま演劇の脚本になるという形式です。演劇の脚本を実際に読む人はあまり多くはないけれども，この劇小説だったら一般読者にも読みやすいし，役者が演じる場合にも場面がよくわかるので便利であるとスタインベックは考えました。

しかし，私が今回，貴重な稽古見学という機会をいただいて認識したことは，演劇というものは，原作者の意向通りに作られるものではないということです。即興劇でない限りは，もちろん，まず原作ありきですが，舞台というものは，原作者の意向に，舞台監督や演出家などのスタッフの意向が加えられ，そして役を演じる役者たちによって目に見える形として表現されるのです。さらに舞台装置や小道具，役者の衣装や音響効果なども加わり，舞台で演じられたときの観客の反応も交じり合って，一つの作品ができあがるのです。これだけの要素が加わって一つの演劇作品ができあがるということは，裏を返せば原作の出来不出来は，確かに本源的に重要なものではあるかもしれませんが，原作の不出来がそれほど致命的なものではなく，原作の不出来を，いわゆる演出や演技でカバーすることはいくらでも可能であろうということです。今回の，スタッフとキャストの爛々と燃ゆる眼を見たら，このスタインベックの「失敗作」がきっと成功作になって仕上げられるという確かな予感を私は感じています。

写真10：板橋区板橋いこいの家の稽古現場にて，2012.4.15

本作品のタイトル『爛々と燃ゆる』についても少し解説しておきたいと思います。これは，イギリスの詩人ウィリアム・ブレイク（William Blake）の有名な詩の一節“Tiger! Tiger! Burning Bright”からとったものです。トラの筋肉隆々のたくましさを歌ったこの詩において「爛々と燃ゆる」ように光っているものはその眼です。スタインベックという作家は登場人物（や動物）の眼の描写を重要視しています。舞台では演じている役者たちの眼にも注目してご覧いただければと思います。

作者スタインベックが，この「劇小説」という形式を使った意図のひとつに，一般読者にも劇作品を読んでもらいたいというものがありました。この演劇をご覧になって興味を持たれた皆様には，是非，原作を翻訳ででも読んでみることをお薦めします。現在，最も入手しやすい本作品の翻訳は大阪教育図書から出版されている『スタインベック全集』第8巻に収められています。この全20巻からなる『スタインベック全集』は，私も所属している日本ジョン・スタインベックのプロジェクトとして刊行されたものです。現在，日本ジョン・スタインベック協会では，スタインベックに関心のある入会希望者を募集しております。申し込み・お問い合わせなどは下記までお願いいたします。

日本ジョン・スタインベック協会事務局
大東文化大学経済学部社会経済学科　中垣恒太郎研究室
〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1
電話（ここでは省略）
email（ここでは省略）

本公演がきっかけで，多くの方々がスタインベックの素晴らしい世界に触れることは，スタインベックを愛好する私どもにとっても大きな喜びです。今年，生誕110周年となる天国のジョン・スタインベックさんもきっと喜んでいてくれるものと信じて，この文章を終えたいと思います。

山内　圭(やまうち きよし)プロフィール

○1965 年静岡県生まれ

○横浜国立大学大学院修了

○横浜国立大学，東海大学，国士舘大学，麻布大学，駒沢女子短期大学，岡山理科大学等で教鞭を取り，現在，新見公立大学教授

○日本ジョン・スタインベック協会理事（学会誌 *Steinbeck Studies* 編集長）

○スタインベック原作の演劇『怒りの葡萄』『エデンの東』『二十日鼠と人間』の劇評執筆

本公演では，『スタインベック全集』第 8 巻に収められている田中啓介訳に基づいた脚本が使われた。スタッフとして，プロデューサーが小沢ミナコと塚原英志，記録映像が井野口功一，表紙絵が小澤恵子，企画・制作が板橋演劇研究会であった。上演日時は，5 月 17 日（木）19 時～，18 日（金）14 時～，19 時～，19 日（土）14 時～，18 時～，20 日（日）14 時～の全 6 公演（開場は各開演 30 分前）であった。劇場は，渋谷ギャラリー ルデコ（東京都渋谷区渋谷 3-16-3 ルデコビル 4F）で，チケットは，前売 2,500 円，当日 2,800 円で，全席自由での販売となった。

写真11：渋谷ギャラリールデコ, 2012.5.19

写真12：渋谷ギャラリールデコ, 2012.5.19

写真13：渋谷ギャラリールデコ, 2012.5.19

5 月 17 日，開演日を迎え，プロデューサーの塚原より，なかなかよい出来に仕上がっているとの報告を受けた。筆者は 5 月 19 日（土）に上京し，14 時からの昼公演と 18 時からの夜公演の招待を受けた。

今回の上演会場は，写真 14 および 15 のような感じであった。

通常の舞台は，舞台下の客席から舞台上の演劇を見上げる，あるいは 2 階席などから見下ろすという見方をするが，今回は，「舞台」と言っても，客席と同じ高さのフロアなので，同じ高さで演じる役者達の演技を本当に手が届きそうなところから観ることができるものであった。会場の渋谷ギャラリールデコは，その名の通り「ギャラリー」であり（公演時にも，別の階では，写真展が開催されていた, 写真 11 参照），舞台のない空間であった。その特性をうまく活かし，役者たちが演じるのと同じ目線からの観劇が可能となるよう，周りに椅子が配してあった。観客にとっては，手を伸ばせば触れることができるくらい

写真14：渋谷ギャラリールデコ, 2012.5.19

写真15：渋谷ギャラリールデコ, 2012.5.19

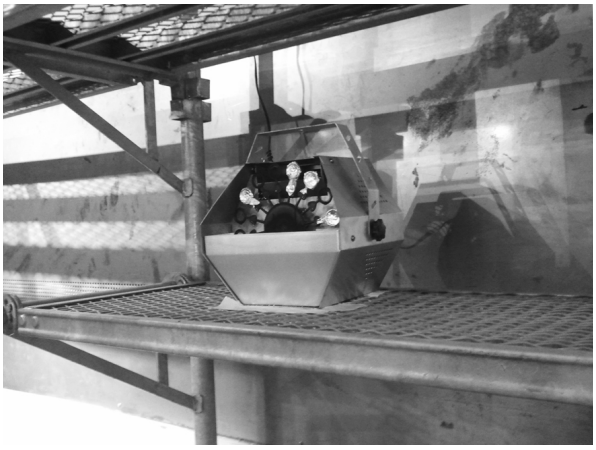

写真16：渋谷ギャラリールデコ, 2012.5.19

の目の前で役者たちが演じる様子を見ることができるのが，すばらしいことであった。

スタインベックの原作においては，この劇は3つの場面設定がなされている。それらは，1）サーカスのテント，2）農場，そして3）船上，である。これは，場面設定を変えながらも，共通する登場人物およびプロットを描くことにより，このような出来事はあらゆる人に起こりうるということを示すスタインベックの実験的試みであった。サーカスの道化師は空を制する者，農民は大地を制する者，そして船乗りは海を制する者で，スタインベックはこれらにより万人（エブリマン）を表していたと解釈できる。ただし，本公演においては，演出的制約もあり，場面は農場に固定された。このスタインベックの「実験」をあえて思い切って一つの場面に固定したことが，本公演の最大の工夫と言えるだろう。サーカス的要素は，フレンド・エドのコミカルな動作や舞台の最後に用いられたシャボン玉(製造機)で表現されているとも解釈できる。

その他，ミセス・マローイや妖精やゾーン先生を舞台に登場させたこと，その妖精を舞台の最初と最後に登場させることによって枠組みをつけたこと（シェイクスピア演劇の影響か），第3幕の冬の場面ではエアコンを強くして会場の気温を下げていたようだったこと[3]，ストローとシャボン玉液で口で作るものからシャボン玉製造機によって作られるものまでシャボン玉を劇中おもしろく使っていたことなども演出上の工夫と言える。また，ジョー・ソール役の浅井透麻の実直さ，フレンド・エド役の塚原英志のコミカルさ，モーディン役の青山碧のきらめき，ビクター役の岡田純一のジェームス・ディーンを想起させる鋭い若さ，ミセス・マローイ役の小沢ミナコの演技力の高さ，そして妖精役の深津哲也のえも言われぬ不思議な雰囲気などを，それぞれ効果的に用いた演劇づくりがされていた。

5月19日（土）18時からの公演後は，トークショーが予定されていて，筆者も出演者たちに混じって「出演」させてもらった。そのトークショーにおいて，筆者は大体下記のようなことを語った。

写真17：渋谷ギャラリールデコ, 2012.5.19

ＭＣ（小沢ミナコ）：鑑賞の感想をお聞かせください。
山内：若い頃に原作を読んで感動したこの作品を舞台上で表現してもらって大変感激している。4月15日に稽古の見学をさせてもらい，その際，途中経過は見せてもらったが，それが，このような形で完成されたものを見せてもらい，非常に嬉しい。

ＭＣ：失敗作品と言われる一番の理由はなんだと思いますか？
山内：私はスタインベック大好き人間なので，実はあまり「失敗作」とは呼びたくない。質問を否定するような言い方で申し訳ないですが，ブロードウェイで自分の作品が上演されることを願っている脚本家は何人もいるはずで，スタインベックのこの『爛々と燃ゆる』という作品は，ブロードウェイで13回も上演されているのです。例えてみれば，野球をしていてプロ野球選手になりたい人がたくさんいるなかで，プロ野球に入団し，１軍の試合に13試合だけど出場できたという人を野球で成功したと呼ぶべきか，失敗したと呼ぶべきかということと近いかもし

れません。ただ，ノーベル賞をはじめさまざまな賞を受賞しているスタインベックの実力や他の作品の成功から見れば，この作品は比較的成功しなかった作品と言えるのかもしれません。チラシにも書かせてもらったように，子どもができない夫婦の心の葛藤を中心に描くこの作品は，当時の米国においてもまだ「早すぎた」作品なのかもしれません。

ＭＣ：スタインベック作品の魅力，好きな作品・舞台化してみたい作品は何ですか。
山内：人間描写や語りが優れている。人間を生物の一種として描いている。この作品も「爛々と燃ゆる」ものは，眼であるが，スタインベックは，人間描写をする場合に眼の描写に重きを置いている。あとは，興味をもった方は是非原作を読んでいただくといいのですが，例えば円熟期の作品である『エデンの東』などを読んでみると，スタインベックがそれまでに人から聞いた話や書物等で得た知識や自分で考えてきたことなど，いろいろなものが作品に盛り込まれているので，読んでいて面白い。どうだ，俺の話を読んでみろというような作家側の心の余裕さえ感じられるのが魅力。好きな作品は，こども向けの作品と位置づけられることもあるが『赤い小馬』。父親から小馬をプレゼントされる少年ジョディの話だが，スタインベックの子ども時代を描いた自叙伝的な話である。少年の成長が描かれていて面白い。馬をどうするかということで，舞台化は難しいかもしれませんが，是非，舞台化してもらいたい作品です。

ＭＣ：日本ジョン・スタインベック協会会員募集宣伝をどうぞ。
山内：パンフレットにも少し書かせてもらいましたが，スタインベックの研究者や愛好家で作る日本ジョン・スタイベック協会という組織があります。もし今回の舞台を見て興味を持ってくださった方がいれば，年会費が3000円となっていますが，入会していただきましたら大変嬉しく思います。

ＭＣ：協会の活動説明をお願いします。
山内：年１回「日本ジョン・スタインベック学会」というものを開催するのですが，今年の学会は，今月５月28日（月）10時から東武東上線練馬駅が最寄りの大東文化大学で開催されます。今年は，『エデンの東』の翻訳者である土屋政雄氏もお招きして特別講演をしていただいたり，スタインベック生誕110周年，ノーベル賞受賞50周年を記念したシンポジウムも開かれたりしますので，ご興味がおありの方は是非ご参加いただければと思います。今回は，このような宣伝の機会を与えていただいてありがとうございました。

公演後，本作品はDVD化された。先述のように，筆者の作品紹介文がジャケットに掲載された。

写真18：『爛々と燃ゆる』DVDジャケット表面

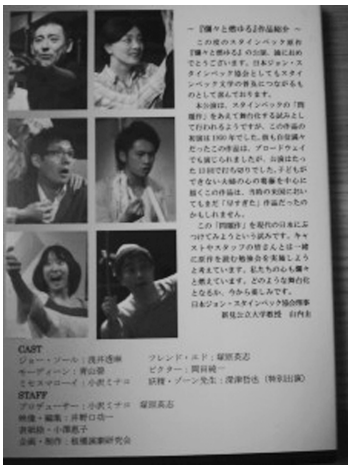

写真19：『爛々と燃ゆる』DVDジャケット裏面

また，５月１日～３日にカリフォルニア州サンノゼのサンノゼ州立大学で開催された国際スタインベック学会でこの日本初の『爛々と燃ゆる』公演について"*Burning Bright* was burning bright in Japan"と題し，日本初の『爛々と燃ゆる』公演の報告発表を行った。

この学会が開催されたサンノゼは，筆者が学生時代，語学研修短期留学で滞在した街であった。研究発表には25年前に語学研修で英語を教えてくださったランディ・マーティン先生とホームステイ先のホストマザーのトニ・バロウズさんも聞きに来てくれ，恩師のランディ先生から花束をいただいたことも付記しておきたい。

写真20：サンノゼ州立大学, 2013.5.1

写真21：サンノゼ州立大学, 2013.5.1

写真22：ランディ・マーティン先生と, 2013.5.1

文献

1）*Burning Bright* は『爛々と燃える』，あるいは『爛々と燃ゆる』と訳されているが，今回の公演では，『爛々と燃ゆる』を採用した。それは，このタイトル *Burning Bright* は英国の詩人 William Blake（ウィリアム・ブレイク, 1757-1827）の「虎」（Tyger, Tyger）（現代英語で書けば，Tiger, Tiger となる）の詩の一節から取られたものである。その出典の古さを表すためにも，このタイトルを『爛々と燃ゆる』とした。

2）塚原英志,「貴重な一歩でした！」2012 年 4 月 17 日「～ガリバーがゆく！！～」2013 年 9 月 1 日閲覧 <http://ameblo.jp/tsukaharaeiji/entry-11225248278.html>

3）これは，後に塚原に確認したところ，熱演の結果暑くなったので，エアコンをつけただけというのが真相だったそうである。

The First Performance of John Steinbeck's *Burning Bright* in Japan

Kiyoshi YAMAUCHI

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

This paper reports on the first performance of John Steinbeck's *Burning Bright* in Japan, which was staged by Itabashi Theatrical Group. I was involved in this performance as an advisor.